

ダを採集した二次林はヤシ、トウその他の木本性つる植物、タコノキ類が豊富で、高さ 20 m 以上に達する高木などの樹幹には着生植物や登攀植物がおびただしい。

本種は中高木の枝に着生し、根茎が非常に長く垂下して長さ 5 m にもなる点は特異である。根茎には多数のごく短かな側枝がまばらにあって、1から6(稀に10まで)の単葉を叢生している。葉はまた主軸にも出るがこの場合は1葉づゝ着く。葉の着き方で主軸と側枝との間に明らかな差異の認められることから、長枝と短枝の分化がみられる解釈できるかも知れない。このシダは根茎に楯状で中心部に肥厚した細胞壁をもつ鱗片のあること、胞子嚢群に包膜や楯状の鱗片様附属物を欠き多細胞の透明な側糸を混じえること、遊離小脈を含む複雑な網状脈系をもつこと、主側脈の基部から遠心的に出て胞子嚢群に入る小脈をもつこと等でオキナワウラボシとその近縁種に明らかに類縁関係をもつと考えられる。この群の分類にはいくつかの見解があるが、ここでは Copeland の分類⁴⁾に従い本新種をヌカボシクリハラン属の一種として取扱うこととした。

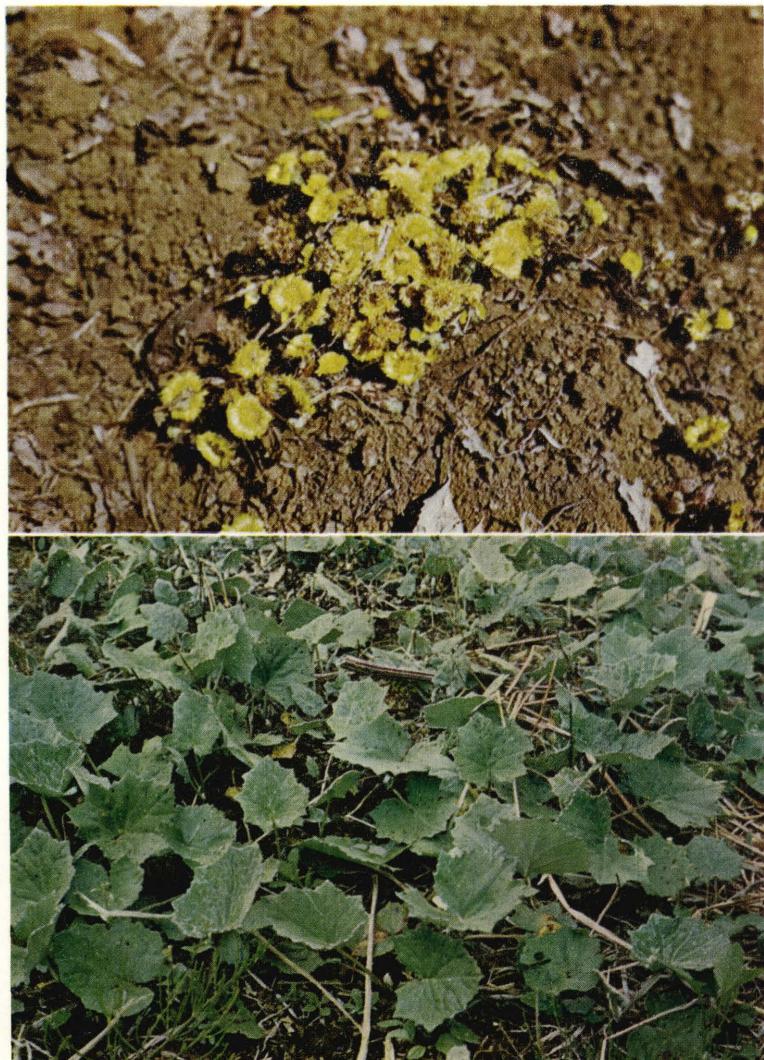
○欽冬を咲かす(富樫 誠) Makoto TOGASHI: Cultivation of *Tussilago farfara* L. in Japan (Plate VIII)

こゝ4年来毎年春に咲き続けている。牧野先生の墓前に花を捧げた。先生は遂にこの花の生品は見ずに逝れ、それなのにこの植物に大変に興味を持って居られた様であった。本誌第1巻1号(1916)、雑誌「本草」3号(1932)、「科学知識」第14巻6号(1934)等に図入りで詳細にこの属と近い種類の論説がある。又「牧野植物一家言」(1956)には「未だ今日に至るも、誰れ一人これを輸入した者は無い」と云って言外に生の花を見られないのを残念がって居られた。それで海外より種子入手して数回に及び播種したが発芽せず、この種の如く早春に開花結実の種類は取り播きが望ましく1年を経過すれば発芽能力がなくなる事に気付いた。幸にフランス国立中央農事試験場長の G. Morel 博士が来日され日光に案内し、その期に種子を依頼した。こころよく1970年6月5日にフランス中央部山地より採集し送って下さった。種子が新鮮であったのすべくに発芽し初秋に富士山麓に移植し翌年早春に初花が咲いた。以来株は増殖し、花はタンポポの如く葉はフキの如く、ランナーを出して新株をつくる。このカラー写真と拙文を牧野先生に献じたい。

Explanation of Plate VIII

Tussilago farfara L. (Flowering stage). Cultivated at Oshino, Yamanashi Pref.

Tussilago farfara L. (Vegetative stage). Cultivated at Oshino, Yamanashi Pref.



M. TOGASHI: *Tussilago farfara*